근현대에 있어서의 접사적 자음형태소의 변천의 일례

조영희*
yhee0410@ggu.ac.kr

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 研究対象と方法
2.1. 研究対象
2.2. 研究方法
Ⅲ. 大正・昭和期資料の集計
Ⅳ. <ひと>を表す接辞的字音形態素の初出語数の変動
Ⅴ. 主な接辞的字音形態素の分析
5.1. 初出語数が増える接辞的字音形態素「員」
5.2. 初出語数が減少してから再び増加する接辞的字音形態素「人ジン」
5.3. 初出語数が減少する接辞的字音形態素「人ニン」
Ⅵ. まとめ

Abstract

복합어기(複合語基)로서의 이자(二字)한어와 이미 존재하는 화어(和語)어기, 외래어어기와 결합하는 자음형태소의 접사적용법은, 이자한어의 생산이 정점을 지난 명치말기 이후 활발해진 것이며, 현대에 있어서도 여전히 생산적이다. 본 논문에서는 명치 이후 전후까지의 근현대에 있어서의 접사적 자음형태소의 변천의 일례로 <사람>을 나타내는 접사적 자음형태소의 변천에 대해 고찰했다.

『分類語彙表』『類語例解辞典』『逆引き広辞苑』『大言海分類語彙表』『日本語逆引き辞典』에서 25의 현대어에 있어서의 <사람>을 나타내는 접사적 자음형태소를 추출하여, 대정・쇼와기의 『井上英和大辞典』(大正4年) 『新英和大辞典初版』(昭和2年) 『新英和大辞典第三版』(昭和28年), 세 종류의 영화(英和)사전의 역어에서 그것을 포함하는 용례를 수집했다. 수집한 용례의 상기 세 종류의 영화(英和)사전의 초출을 조사한 결과, 다음의 사실이 밝혀졌다.

* 금강대학교(통상/행정학부) 전임강사 일본어학 전공

① 명치 이후 전후 동안 유일하게 초출어수가 증가하는 접사적 자음형태소는「員」이다. 전후, 새로운 직종이 증가하고 그에 종사하는 사람을 나타낼 필요성에 의해「員」을 포함하는 <회사나 단체 속에서 어떤 일을 담당하는 사람>을 뜻하는 역어가 증가했기 때문이라고 보여진다.
② 초출어수가 일단 감소한 후 다시 증가하는「人ジン」은, 쇼와기에 들어서면서「人ジン」의 앞에 오는 성분이 <장소> <시간> <상태>를 나타내는 것 이외에 <활동> <정신>을 나타내는 것으로까지 확대되어, 조어기능이 확대되었다.
③ 초출어수가 감소하는 접사적 자음형태소 중에서도「人ニン」은, 그 의미가 <어떤 종류의 노동에 종사하는 사람> <법률관계상의 주체>로 축소되었고, 그 이외의 일반적인 <행위의 주체>를 나타내는 의미는「者」에 흡수되어, 조어기능이 축소되었다.

Key Words : 접사적 자음형태소, 어기, 초출어수, 조어기능(接辞的 字音形態素, 語基, 初出語数, 造語機能)

Ⅰ. はじめに

字音形態素には、単独で語を構成したり二字漢語を構成したりする用法以外に複合語基としての二字漢語やすでに存在する和語語基、外来語語基と結合する接辞的用法を持つものがある。このような接辞的用法は、二字漢語の生産が頂点を過ぎた明治末期以降活発になったものであり、現代においてもなお生産的である。本稿では、接辞的用法を持つ接辞的字音形態素の明治末期以降戦後までの近現代における変遷について考察することを目的とするが、その一例として<人>を表す接辞的字音形態素について考察する。

Ⅱ. 研究対象と方法

2.1. 研究対象

野村雅昭(1978)は、字音形態素の使用度数分布と結合対象語基数の分布の調査を通じて接辞的字音形態素の中でも後部分に来るものが使用度数が高く、結

合力が強いと指摘している。本稿では後部分に来る<ひと>を表す接辞的字音形態素を選び、研究対象とする。後部分に来る接辞的字音形態素の中でも<ひと>を表すものを選んだ理由は、先行研究の調査結果、後部分に来るものの中に<ひと>を表す接辞的字音形態素が多く含まれていること、<ひと>は<人間活動>の主体を表すもので、語彙分類の基本的な範疇の一つであるからである。

2.2. 研究方法

まず、現代語資料から主な<ひと>を表す接辞的字音形態素を抽出し、その接辞的字音形態素を含む用例を大正・昭和の英和辞書から採集する。現代語資料の主なテキストとしては、『分類語彙表』(国立国語研究所編、1964、秀英出版)『類語例解辞典』(遠藤織枝他編、1994、小学館)を使い、それを補う補助的なテキストとして 『逆引き広辞苑』(岩波書店辞典編集部編、1992、岩波書店) 『大言海分類語彙表』(風間力三著、1979、富山房)『日本語逆引き辞典』(北原保雄編、1991、大修館書店)を使った。まず、『分類語彙表』と 『類語例解辞典』の用例から<ひと>を表す接辞的字音形態素を抽出し、それを含む用例を集める。

例) 異邦人 外国人 野蛮人→<ひと>を表す接辞的字音形態素「人ジン」を抽出し、「異邦人」「外国人」「野蛮人」を「人ジン」の用例として採集する。

さらに、その接辞的字音形態素を含む用例をその他の補助的なテキストから補った。以上の作業の結果集まった<ひと>を表す接辞的字音形態素のうち、用例数が10以上あるものを対象とするが、最終的には以下の点を考慮して選別した。

ア. 『三省堂国語辞典第四版』(見坊豪紀他編、1993、三省堂) 『日本語逆引き辞典』によって現代語であるか否かを判定して現代語の用例が乏しい「親シン」「衆シュ」「賊ゾク」「党トウ」は省く。ただし、「夫フ」は 「婦フ」との関連性を考えて調査対象に含める。

イ. 用例に歴史的なものが多く、現代語としての使用頻度が低いと思われるのは除く。

例) 「衆シュウ」「僧ソウ」「坊ボウ」

ウ. そのほか、「司シ」「主シュ」「徒ト」は用例数は少ないが、明治末期以降の変

遷を考えたとき、変遷の可能性がありそうなものとして追加して調べることにする。現代語資料では拾えなかったが、あとから追加した「吏リ」「監カン」も入れて最終的に次の25の<人>を表す接辞的字音形態素を選定した。

員イン　家カ　官カン　漢カン　監カン　工コウ　師シ　士シ
司シ　使シ　児ジ　者シャ　手シュ　主シュ　人ジン　生セイ
僧ソウ　長チョウ　徒ト　人ニン　婦フ　夫フ　民ミン
役ヤク　吏リ

以上の25の<ひと>を表す接辞的字音形態素の明治末期以降戦後までの変遷を見るために、大正、昭和初期、戦後の主な英和辞書から25の<ひと>を表す接辞的字音形態素の用例を集めた。テキストとして英和辞書を使う理由は、接辞的字音形態素を含む語は単位数が多く、国語辞書の見出し語として立ちにくいことと、英和辞書は国語辞書に比べて定着度の低い語も収録される可能性が高く、なるべく多くの用例に基づいて接辞的字音形態素の変遷を考察するためのテキストとして適していると考えられるからである。以下に、テキストとして使った英和辞書について示しておく。

	①『井上英和大辞典』	②『新英和大辞典初版』	③『新英和大辞典第三版』
著者	井上十吉	岡倉由三郎 編	市河三喜・岩崎民平・河村重次郎 編
出版年度	大正4年(1915)	昭和2年(1927)	昭和28年(1953)
出版社	至誠堂	研究社	研究社
構成ページ	Aの部からZの部まで2326ページ	Aの部からZの部まで2031ページ	Aの部からZの部まで2102ページ
見出し語数	約7万1千語(百ページまでの見出し語数3104語×23)	約8万5千語(百ページまでの見出し語数4244語×20)	約12万5千6百語(百ページまでの見出し語数5982語×21)

以下、『井上英和大辞典』『新英和大辞典初版』『新英和大辞典第三版』を『井上』『研27』『研53』の略称で示す。『井上』と『研27』の見出し語数は約1万5千ぐらいしか差がないが、『研53』では『研27』より約4万ぐらい見出し語数が増えている。それは、『研53』で『井上』『研27』にない固有名詞の見出し語が補充されたことと、『研53』の見出し語の立て方が『井上』『研27』とは違って、グループ見出し

の方式を採用しているからである。グループ見出しの方式とは、1語の見出し語だけでなく、2語、3語によるものも独立した見出し語として立てる方式である。以下に、見出し語「golden」とそれと関連する見出し語の立て方を『研27』と『研53』で比較したものを示す。両者を比較すると、線を引いた『研27』の小見出し語を『研53』では独立した見出し語として立てているため、『研27』より『研53』の見出し語が増えることになる。意味を説明する部分は省略して示した。

『研27』	『研53』
golden adj.	golden adj.
golden age	golden age
	golden aster
golden balls	golden balls
	Golden buck
Golden Bull golden calf	Golden Bull
	golden calf
	golden chain
Golden Fleece	Golden Delicious
	golden eagle
Golden Horn	golden-eye
golden key golden mean	Golden Fleece
	Golden Gate
golden number	golden glow, golden-glow
	golden goose
golden opportunity	Golden Horn
golden pheasant golden rain	golden key
	Golden legend
	golden mean
	gold'en-mouthed
	golden number
	golden pheasant

『井上』『研27』『研53』から用例を採集する際は、以下の基準にしたがった。

ア. 次の例のように表記上は字音語の可能性を有していても、訓読みの振り仮名がついている場合は除外する。

例) Eurasian n. 混血児 アヒノコ
magpie n. 饒舌家 オシヤベリ 『井上』

イ. 同じ辞書で何回も出てくる訳語は最初の採集例で代表させる。

例) accuser n. 告発者
beefer n. 告発者
informer n. 告発者
prosecutor n. 告発者
relator n. 告発者 『研53』

ウ. 名詞の英語見出し語だけでなく、形容詞、動詞の訳語に該当する用例がある場合、または例文に該当する用例がある場合もとる。

例) minimus a.(学校にて)同姓生徒三人以上にて最年少者の。

『井上』

「最年少者」をとる

エ. 小見出し語は親見出し語といっしょに採集し、親見出し語で引けるようにする。

例) absent a. absent person 不在者 『研53』

オ. 次のような異体字、旧字体は新字体の用例と同等に扱う。

例) pertitioner n. 歎願者 「嘆願者」と同等に扱う
embezzler n. 竊用者 「窃用者」と同等に扱う 『井上』

Ⅲ. 大正・昭和期資料の集計

表1は、『井上』『研27』『研53』から25の<ひと>を表す字音形態素成分の用例を採集し、集計したものである。

〈表1〉〈ひと〉を表す接辞的字音形態素の集計

接辞的 字音形態素	『井上』の 用例数	『研27』の 用例数	『研53』の 用例数	用例の 延べ語数	用例の 異なり語数
者	2410	2364	2037	6811	4387
人ニン	353	356	316	1025	588
家	280	346	274	900	574
員	76	124	135	335	203
師	96	92	72	260	182
官	59	83	89	231	149
長	53	75	72	200	145
工	29	34	54	117	86
人ジン	199	264	163	626	77
手	29	37	39	105	68
生	25	28	32	85	54
士	24	19	28	71	42
漢	23	13	8	44	30
吏	17	15	9	41	30
婦	14	12	18	44	29
夫	16	13	18	47	28
民	11	21	23	55	28
役	11	11	7	29	21
児	9	10	13	32	18
徒	15	29	10	54	10
司	1	3	0	4	4
子	2	1	2	5	3
監	1	1	0	2	2
使	2	1	0	3	2
主	0	1	1	2	1
合計	3755	3953	3420	11128	6761

<ひと>を表す接辞的字音形態素の中でも「員」「士」「人ジン」「生」「徒」「民」の用例には、固有名詞と結合するものがある。こういうのは固有名詞と接辞的字音形態素との結合を一つのパターンとし、固有名詞以外の成分と結合した用例一つに相当するものとして考える。例えば、「月光党員」「モータク隊員」など固有名詞と「員」が結合した用例は、全部<集まり・組織・団体名の固有名詞＋員>のパターン一つとして数えた。したがって、表1の「員」「士」「人ジン」「生」「徒」

「民」の異なり語数は、「固有名詞以外の成分と結合する用例数＋固有名詞と結合するパターン数」となる。

表2は、<ひと>を表す接辞的字音形態素の用例からみた各辞書間の訳語の関係を示したものである。『井上』『研27』『研53』に共通する訳語は、固有名詞と結合するものを除いた総異なり語数の約15パーセント程度で、一種の辞書にしかない訳語が約20パーセント前後あることから、明治末期から戦後まで一定した訳語の変動があったことがうかがえる。特に　『井上』にしかない訳語がもっとも多いことは、明治末期から昭和初期の間に訳語の変動がもっとも大きかったことを反映するものと考えられる。(括弧内の数字は百分比)

〈表2〉各辞書間訳語の関係

分類	訳語数	
○ ××	1491(22.0)	○ ××　『井上』にしかない譯語
○ ○ ×	753(11.2)	○ ○ ×　『井上』『研27』にあって『研53』にない譯語
○ ×○	255(3.8)	○ ×○　『井上』『研53』にあって『研27』にない譯語
○ ○ ○	1068(15.9)	○ ○ ○『井上』『研27』『研53』に共通する譯語
×○ ○	612(9.1)	×○ ○　『研27』『研53』にあって『井上』にない譯語
×○ ×	1233(18.2)	×○ ×　『研27』にしかない譯語
××○	1343(19.8)	××○　『研53』にしかない譯語
＊総異なり語数	6755(100.0)	

(＊総異なり語数は固有名詞と結合する用例は含まない)

Ⅳ. 〈ひと〉を表す接辞的字音形態素の初出語数の変動

接辞的字音形態素の変遷をみるためには、その接辞的字音形態素を含む用例が出現する時期を調べることが重要である。したがって、<ひと>を表す接辞的字音形態素を含む用例が『井上』『研27』『研53』のうち、どれに最初に出現するのか、その初出を調べた。ここでの初出の意味は、調べた三種の辞書だけを対象とした狭い意味のものである。『井上』『研27』『研53』における初出語数の推移は、明治末期から昭和初期、戦後の間の接辞的字音形態素の造語力の推移を反映するも

のと考えられる。

〈表3〉辞書別初出語数

接辞的 字音形態素	『井上』	『研27』	『研53』	＊総異なり語数
者	2410	1152	825	4387
人ニン	353	144	91	588
家	280	198	96	574
員	60	61	81	203
師	96	57	29	182
官	59	46	44	149
長	53	50	42	145
工	29	20	37	86
人ジン	46	14	16	76
手	29	21	18	68
生	25	16	12	53
士	17	10	14	41
漢	23	5	2	30
吏	17	9	4	30
婦	14	5	10	29
夫	16	5	7	28
民	10	10	7	27
役	11	7	3	21
児	9	5	4	18
徒	4	4	1	9
司	1	3	0	4
子	2	1	2	3
監	1	1	0	2
使	2	0	0	2
主	0	1	0	1
合計	3567	3953	1343	6755

(＊総異なり語数は、「員」「士」「人ジン」「生」「徒」「民」の固有名詞と結合するパターン数は含まない)

次の表4は、『井上』の初出語数を100としたときの『研27』『研53』の初出語数の出現率を示したものである。(括弧内の数字は百分比)

〈表4〉接辞的字音形態素別初出語数の出現率

接辞的 字音形態素	『井上』	『研27』	『研53』
者	2410(100.0)	1152 (47.8)	825(34.2)
人ニン	353(100.0)	144(40.8)	91(25.8)
家	280(100.0)	198(70.7)	96(34.3)
*員	60(100.0)	61(101.7)	81(135.0)
師	96(100.0)	57(59.4)	29(30.2)
官	59(100.0)	46(78.0)	44(74.6)
長	53(100.0)	50(94.3)	42(79.2)
*工	29(100.0)	20(69.0)	37(127.6)
*人ジン	46(100.0)	14(30.4)	16(34.8)
手	29(100.0)	21(72.4)	18(62.1)
生	25(100.0)	16(64.0)	12(48.0)
*士	17(100.0)	10(58.8)	14(82.4)
吏	17(100.0)	9(52.9)	4(23.5)
漢	23(100.0)	5(21.7)	2(8.7)
*婦	14(100.0)	5(35.7)	10(71.4)
*夫	16(100.0)	5(31.3)	7(43.8)
民	10(100.0)	10(100.0)	7(70.0)
役	11(100.0)	7(63.6)	3(27.3)
児	9(100.0)	5(55.6)	4(44.4)
徒	4(100.0)	4(100.0)	1(25.0)
司	1(100.0)	3(300.0)	0(0.0)
*子	2(100.0)	1(50.0)	2(100.0)
監	1(100.0)	1(100.0)	0(0.0)
使	2(100.0)	0(0.0)	0(0.0)
主	0(100.0)	1(－)	0(－)
合計	3567(100.0)	3953(110.8)	1343(37.7)

(＊の接辞的字音形態素は、初出語数の出現率が増加するもの、または、一旦減少して再び増加するものである)

表3と表4の集計から、<ひと>を表す接辞的字音形態素は次の三つに分けて考えることができる。

ア. 初出語数が増える接辞的字音形態素

初出語数が増えるということは、その接辞的字音形態素が引き続き造語力

を発揮して、新しい語を作り出すことを意味する。『井上』から 『研53』に至るまで初出語数が増える唯一のものは「員」である。

イ. 初出語数が減少する接辞的字音形態素

調べた接辞的字音形態素のほとんどは初出語数が減少している。次は初出語数が減少するものである。

家 官 漢 師 使 児 者 手 生 長 徒 人ニン 民 役 吏

ウ. 初出語数が減少してから再び増加する接辞的字音形態素

初出語数が『研27』で一旦減少して『研53』になって再び増えるものには「工」「人ジン」「士」「子」「婦」「夫」がある。これらは、数字の上では戦後になって造語力が復活したように見えるものである。

V. 主な接辞的字音形態素の分析

5.1. 初出語数が増える接辞的字音形態素「員」

国語辞書によると、「員」は次の意味を表す。

-いん[員] (造語)
① 会社や団体を組み立てている者のひとり。「会社-」
② 会社や団体の中である仕事を受け持つ人。「検査-・外務-」

『三省堂国語辞典第四版』p.77

「① 会社や団体を組み立てている者のひとり」を表す「員」は、<集まり・組織・団体名>を表す成分と結合する。

例) 海岸警備隊-員 学会-員 合唱隊-員 倶楽部-員 警察署-員
公使館-員 写真班-員 少年団-員 司令部-員 内閣-員
無政府党-員

三種の英和辞書の「員」の初出語数における「① 会社や団体を組み立てている者のひとり」を表す「員」の初出語数は、次の表5で示すように、35語、38語、34語

と、若干の違いはあるが、一定している。したがって、『研53』で増えた「員」の用例は「② 会社や団体の中である仕事を受け持つ人」を表すものであることになる。

〈表5〉〈集まり・組織・団体名〉と結合する「員」の初出語数

	『井上』	『研27』	『研53』	合計
<集まり・組織・団体名>と結合する「員」の初出語数／各辞書別「員」の初出語数	35／60	38／61	34／81	107／202

(初出語数の集計では固有名詞と結合した用例は除いたので、表5でも固有名詞と「員」が結合した用例は含まない)

『研53』が初出の「員」の用例のうち、「② 会社や団体の中である仕事を受け持つ人」を意味する47の例を『井上』『研27』『研53』でその訳語の変遷を調べると、次の三つの傾向がみられる。

ア.『研53』が初出の「② 会社や団体の中である仕事を受け持つ人」を表す47の「員」の用例のうち、16例は『井上』『研27』にない英語見出し語が『研53』で新たに補充され、そこに「員」の訳語が当てられたものである。以下に、その例を示す。

英語見出し語の補充によって増加する「員」の用例

見出し語	品詞	小見出し語	『井上』	『研27』	『研53』
adman	n		0	0	広告勧誘員
advance	n	advance agent	0	0	興行団の先発員
aircraftman	n		0	0	航空機整備員
aircrew	n		0	0	航空機乗組員
airman	n	air-raid warden	0	0	空襲警備員
business	n	bisiness agent	0	0	(米)(労働組合の)資本家に対する交渉員
c.a.p.	n	civil air patrol	0	0	民間航空巡戒員
fact-finder	n		0	0	実情調査員
ground	n	ground crew	0	0	(飛行場の)地上整備員

newscaster	n		0	0	ニュース編集員
newscaster	n		0	0	ニュース放送員
salespeople	n		0	0	販売員
salespeople	n		0	0	外交員
scouter	n		0	0	少年団指導員
trainman	n		0	0	(米)列車乗務員(制動手、信号手など)
walk	v	walking delegate	0	0	巡察員(以前各工場の労働状況などを視察して歩いた労働組合の役員)

(0は該当する見出し語がないことを意味する)

イ.『研53』が初出の「② 会社や団体の中である仕事を受け持つ人」を表す「員」の用例には、同じ英語見出し語に対して、『研53』で訳語の意味がさらに細分化し、以前の辞書の訳語のほかに新しい意味を表す「員」の訳語が追加される傾向がみられる。以下に、その例を示す。

訳語の意味の細分化によって増加する「員」の用例

見出し語	品詞	用例	『井上』	『研27』	『研53』
agitator	n	宣伝員	動乱者、運動者、扇動者、遊説者	(政治的)運動者、遊説者	扇動者、(政治上)の運動者、遊説者、宣伝員
				扇動者	
assistant	n	商店員	補佐、手伝人、使用人	助手、手伝人、補佐者	助手、補助者、補佐役
			(法)補佐人、幇助者		商店員
canvasser	n	外交員	運動員、遊説者	運動員、奔走者、遊説者	運動員、奔走者、遊説者
			勧誘員	勧誘員、注文取り	勧誘員、外交員、注文取り
			注文取り	調査者	
industrial	n	工業従業員	工業家、実業家、工人、職工	工業家、職工、工手	産業労働者、工業従業員、職工
					生産業者、企業家、製造家
servant	n	従業員	僕、下部、召使、奉公人、雇人	僕、召使、下男、下女、使用人、雇人、家来、従者	召使い、雇い人、しもべ、下男、女中、使用人
			従者	奴隷、喜んで命に従	家来、従者、奉仕

				ふ人	者、一身をささげた人
			(米史)奴隷		公務員、官吏、役人
					従業員、事務員、社員

「英語見出し語の補充」「訳語の意味の細分化」によって訳語が増えることは、それまでになかった新しい概念を表す訳語が増えたことを意味する。戦後新しい職種が増え、会社のような組織の体制が整えられると、新しい職種に従事する人、組織の中で働く人を表す語の必要性も高まる。戦後、<ひと>を表す語彙の中で「員」を含む、「会社や団体の中である仕事を受け持つ人」を表す新しい概念の訳語が増えた理由は、そういった社会の変化に、求めることができる。

5.2. 初出語数が減少してから再び増加する接辞的字音形態素「人ジン」

「人ニン」と「人ジン」の造語機能の違いについては次の先行研究がある

① ニンは和語とも結合するが、ジンは結合しない。
② ニンは用言類の語基としか結合せず、ジンは体言類および相言類の語基としか結合しない。
③ ニンと結合する語基は<動作>をあらわし、ジンと結合する語基は<場所> <時> <活動> <精神>をあらわす語基および相言類の<状態>をあらわす語基としか結合しない。
④ ニンは<数詞>と結合し、ジンは<国名><地名>と結合する。その逆はない。

野村雅昭(1979)pp.744-745

引用した野村雅昭(1979)の「人ジン」と結合する語基の分類にしたがって、「人ジン」の初出語を分類した例を以下に示す。

<場所>	外国人	他国人	地方人	内国人	内地人	本土人
<時>	近代人	現代人	中古人	同時代人		
<活動>	議会人	芸能人	趣味人	職業人	新聞人	
<精神>	知識人	文明人	理性人			
<状態>	旧弊人	未開人	蒙昧人	野蛮人	有色人	

『井上』『研27』『研53』の「人ジン」の初出語の前にくる成分を<場所> <時> <活動> <精神> <状態>に分類した結果、次の傾向がみられる。

ア.『井上』の「人ジン」の初出語の前に来る成分は、<場所>と<時>を表すもの、相言類の<状態>を表すもので、<精神>を表す成分と結合する例は「文明人」1例、<活動>の成分と結合する例はない。

イ.『研27』の「人ジン」の初出語の「人ジン」の前に来る成分は、『井上』と同様<場所>と<時>、相言類の<状態>を表すもので<精神> <活動>の成分と結合する例は1例もない。

ウ.『研53』の「人ジン」の初出語の前に来る成分は<場所> <時>、相言類の<状態>を表すもの以外に<精神> <活動>のものが増える。

ただし、上のことは「人ジン」の初出語の傾向で、「文明人」は初出は『井上』であるが、三種の辞書に共通して出現する。

上に述べた傾向を確かめるために、<活動><精神>の成分と結合する「人ジン」の用例の初出を 『日本国語大辞典』(日本国語大辞典刊行会編、1972、小学館)で調べた。

〈活動〉を表す成分と結合する「人ジン」の用例

用例	『日本国語大辞典』	初出の年代
議会人	見出し語なし	
芸能人	「所得税法」	明治32年(1899)
*財界人	久坂栄二郎『北東の風』	昭和12年(1937)
趣味人	見出し語なし	
職業人	島木健作『生活の探求』	昭和12年(1937)
新聞人	見出し語なし	

〈精神〉を表す成分と結合する「人ジン」の用例

用例	『日本国語大辞典』	初出の年代
知識人	見出し語はあるが、用例なし	
＊知性人	見出し語はあるが、用例なし	
＊文化人	大仏次郎『帰郷』	昭和23年(1948)
文明人	夏目漱石『門』	明治43年(1910)
理性人	阿部知二『冬の宿』	昭和22年(1947)

(＊の用例は現代語補助資料の用例である)

＜活動＞を表す成分と結合したものの場合、『日本国語大辞典』の初出でもっとも早い時期のものは明治末期の 「芸能人」で、その次は昭和12年のものである。＜精神＞を表す成分と結合したものも、明治末期の 「文明人」がもっとも早く、その次は戦後のものである。これらの初出語の出現時期をより詳しく調べるために、明治末期から戦後の間の『井上』『研27』『研53』以外のほかの英和、和英、国語辞書類を調べた。その結果を以下に示す。辞書の略称の正式名は、下に示す。

英和辞書類の〈活動〉〈精神〉を表す成分と結合する「人ジン」の用例

用例	『模範』(1919)	『三省堂』(1928)	『大英和』(1931)	『研36』(1936)	『大英和』(1951)
議会人	×	×	×	×	×
芸能人	×	×	×	×	×
趣味人	×	×	×	×	×
職業人	×	×	×	×	×
新聞人	×	×	×	○	×
知識人	×	×	×	○	×
文明人	×	○	○	○	○
理性人	×	×	×	×	×

『模範』 (1919)・・・・・・神田乃武他編(1919)『模範新英和大辞典』三省堂
『三省堂』(1928)・・・・・・三省堂編集所編(1928)『三省堂英和大辞典』三省堂
『大英和』(1931)・・・・・・市川三喜編(1931)『大英和辞典』富山房
『研36』 (1936)・・・・・・岡倉由三郎編(1936)『新英和大辞典第二版』研究社
『大英和』(1951)・・・・・・市川三喜編(1951)『大英和辞典修訂増補版』富山房

英和辞書の場合、「文明人」は 『模範新英和大辞典』(1919)以外のすべての辞書にあって、調べた用例の中ではもっとも古い時期からみられる。そのほかは「知識人」と「新聞人」が昭和11年の『新英和大辞典第二版』にみられる。しかし、その次の『大英和辞典 修訂増補版』(1951)には、「文明人」しかなく、『新英和大辞典第二版』にあった「知識人」「新聞人」はない。しかし、その直後に出版された『研53』には、すべての用例が出現する。このことから、上の結果は辞書の編集方針に左右された面もあるように思われる。その点では研究社の『新英和大辞典』シリーズはほかの辞書より接辞的字音形態素「人ジン」を含む三単位語の採集に充実しているようである。

和英辞書類の〈活動〉〈精神〉を表す成分と結合する「人ジン」の用例

用例	『井上』(1921)	『斎藤』(1928)	『新和英』(1931)	『新和英』(1949)	『新和英』(1954)
議会人	×	×	×	×	○
芸能人	×	×	×	×	○
趣味人	×	×	×	×	○
職業人	×	×	×	×	×
新聞人	×	×	×	×	×
知識人	×	×	○	○	○
文明人	×	×	○	○	○
理性人	×	×	×	×	×

『井上』 (1921)・・・・・・井上十吉著(1921)『井上和英大辞典』至誠堂
『斎藤』 (1928)・・・・・・斎藤秀三郎編(1928)『斎藤和英大辞典』日英社
『新和英』(1931)・・・・・・武信由太郎編(1931)『研究社新和英大辞典』研究社
『新和英』(1949)・・・・・・武信由太郎編(1949) 『研究社新和英大辞典増補版』研究社
『新和英』(1954)・・・・・・研究社和英大辞典編集部編(1954)
『KENKYUSHA'SNEWJAPANESE-ENGLISH DICTIONARY 第一版』研究社

全体的に英和辞書類と似たような傾向がみられる。ところで、英和辞書類と和英時書類を比較すると、同じ出版社の同じ時期の英和辞書にはのっている

が、同じ時期の和英辞書にはのっていない場合もあった。特に、英和辞書では『井上』(1915)からみられた「文明人」は、同じ著者による1921年の『井上和英大辞典』にはなく、和英辞書類で最初にみられるのは『研究社新和英大辞典』(1931)で、英和辞書類とかなり時期が離れている。そして、『斎藤和英大辞典』(1928)と『研究社新和英大辞典』(1931)の比較からわかるように英和辞書類と同様、和英辞書類でもこの時期の研究社の辞書はほかの辞書に比べ、この類の用例が充実しているという特徴がここでも指摘される。

ところで、和英辞書類で確かめた「人ジン」の用例はすべて、見出し語ではなく、見出し語の説明中の用例として出現するものである。その理由は、接辞的字音形態素を含む三単位語が見出し語として立ちにくいことが大きな要因であると考えられる。

そのほか、昭和10年代以降の国語辞書類も調べてみたが、『辞苑』(新村出、1935、博文館)『明解国語辞典』(金田一京介編、1943、三省堂)『言林』(新村出、1949、全国書房)には1例もなく、『広辞苑』(新村出、1955、岩波書店)に現代語補助資料の<精神>の用例「知性人」があった。『広辞苑第二版』(新村出、1960、岩波書店)には「知性人」のほか、「知識人」と「芸能人」が追加される。

『日本国語大辞典』とほかの英和辞書類、和英辞書類、国語辞書類の調査をあわせて考えると、<活動><精神>の成分と結合する「人ジン」の用例が出現するのは、明治末期であるが、本格的に増えるのは早くても昭和10年前後であると推定される。

「人ジン」の初出語数が『研27』で一旦減少してから『研53』で再び増加しているのは、「人ジン」と結合する成分の範囲が従来の<場所><時><状態>のもの以外に、昭和10年を前後にして<活動><精神>に拡大したからだとみられる。「人ジン」は結合対象となる成分の範囲が拡大し、造語機能が拡大する傾向がみられる。

5.3. 初出語数が減少する接辞的字音形態素「人ニン」

初出語数が減少する<ひと>を表す接辞的字音形態素のうち、『井上』と比較して『研27』と『研53』で初出語数の出現率がもっとも低いのは「漢」で、その次は

「人ニン」である。25の<ひと>を表す接辞的字音形態素の中でも特に「漢」と「人ニン」は、明治末期以降戦後の間、新しい語を作る力が衰えたということになる。「漢」は総異なり語数が30と少ないので、ここでは「人ニン」の造語機能について考察することにする。

『井上』『研27』『研53』で「人ニン」を含む訳語を比較した結果、「人ニン」を含む訳語と「者」を含む訳語が入れ替わる傾向がみられた。訳語の変遷上、「人ニン」を含む訳語と「者」を含む訳語が入れ替わる傾向が著しいのは、「人ニン」と「者」が造語機能の面で重なる部分があるからだと考えられる。「人ニン」と「者」の造語機能を比較し、両者の関係について考察する。

ア.「人ニン」の造語機能

①「人ニン」は用言類の成分と結合し、一般的な<行為の主体>を表す。

例)継承人　見物人　交代人　滞在人　見舞人　要求人

②「人ニン」を含む語には、一般的な<行為の主体>の中でも、<ある主の労働に従事する人>という、より限定された意味を表すものが多く含まれている。

例) 運送人　給仕人　行商人　商売人　代言人　綱渡人
召捕人　貨物取扱人　切符売人　広告取次人　新聞配達人　石炭陸揚人　溝掃除人

③「人ニン」を含む語には、一般的な<行為の主体>の中でも、<法律関係上 の主体>という、より限定された意味を表すものが多く含まれている。次　の「人ニン」を含む語は、辞書に法律用語であることが明記されている例である。

例) 委託人　起訴人　後見人　控訴人　告訴人　差押人
賃借人　遺産相続人　海損清算人　手形引受人
約束手形振出人　利害関係人

「人ニン」は用言類の成分と結合し、一般的な<行為の主体>を表す。そして、一般的な<行為の主体>の中でも、<ある主の労働に従事する人>と<法律関係上の主体>という、より限定された意味を表す場合が多い。特に、「人ニン」を含む四単位以上の語は、ほとんど<ある種の労働に従事する人>と<法律関係上の主体>という、限定された意味を表すものである。

イ.「者」の造語機能

①「者」は体言類、相言類、用言類と結合する。用言類の成分と結合する際、「者」は「人ニン」と同様一般的な<行為の主体>を表す。

例) 体言類の成分との結合例：現実主義者　広告文案者　代数学者
相言類の成分との結合例：違法者　虚弱者　健康者
用言類の成分との結合例：計算者　行動者　非難者　放棄者
空中襲撃者　精霊崇拝者　粗悪品製造者　隣地所有者

② 用言類と結合する「者」の用例には、「人ニン」のように<ある種の労働に従事する人>を表すものが一部あるが少数である。以下に、<ある種の労働に従事する人>を表す「者」の用例と、訳語の変遷上「者」がほかの<ひと>を表す成分に入れ替わる例を示す。

例) 手工者　接骨者　養蜂者　禁製品売買者　銀行営業者
銀行経営者　選挙管理者　陶器製造者　図書館管理者

③ 用言類と結合する「者」は、「人ニン」と同様<法律関係上の主体>を表す。次の例は、辞書に法律用語であることが明記されているものである。

例) 委棄者　遺産者　受遺者　受任者　拝領者　放棄者
共同所有者　指定遺言執行者　受遺産者　抵当権者

ところで、<ある種の労働に従事する人>を表す「者」の用例は、訳語の変遷上ほかの<ひと>を表す字音形態素成分と入れ替わる傾向がみられる。

〈ある種の労働に従事する人〉を表す「者」の用例の変遷

見出し語	『井上』	『研27』	『研53』
apiarist	養蜂者	密蜂飼養者、養蜂家	密蜂飼養家、養蜂家
banker	銀行営業者	銀行営業者	銀行業者
bone setter	接骨者	接骨医	接骨医
ceramist	陶器製造人	陶器製造者	製陶業者
contrabandist	禁製品売買者	禁製品売買者	禁製品売買商
librarian	図書館管理人	図書館管理者	図書館員
manipulator	手工者	手工者	手で扱う人、手で作る人
pilot	水先案内者	水先案内者	水先案内人
retuning officer	選挙管理者	選挙を管理し結果を発表する役人	選挙管理官

用言類の成分と結合する「者」は、「人ニン」と同様、一般的な<行為の主体>を表す。「人ニン」の一般的な<行為の主体>を表すものの中には、<ある種の労働に従事する人><法律関係上の主体>という、より限定された意味を表すものが多かった。それに対して 「者」は、<法律関係上の主体>を表す意味はあるが、<ある種の労働に従事する人>の意味は「人ニン」ほど顕著ではない。

次に、「人ニン」を含む訳語と「者」を含む訳語が入れ替わる具体例をみながら両者の関係について考察する。以下に、「人ニン」を含む訳語と「者」を含む訳語が入れ替わる例を示すが、『井上』『研27』『研53』の訳語のほかに、『新英和大辞典第二版』(1936)の訳語も『研36』の略称でいっしょに示す。

ア.「者」を含むものから「人ニン」を含むものに変わる例

①「運送人」と「運送者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
expressman	運送者	運送人	(荷物)配達人、小荷 物運送人	運送屋
transporter	運送者	運送者	運送者、輸送者	運送者

「expressman」は、『研53』の「運送屋」と『研36』の「(荷物)配達人」の訳語から類推して、<運送の労働に従事する人>を意味する。一方、「transporter」の「運送者」は、一般的な<運送する行為の主体>を表す。「expressman」のように<ある種の労働に従事する人>という限定された意味を表す場合は、「者」を含む訳語から「人ニン」を含む訳語に変わる。

②「運搬人」と「運搬者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
carrier	運送人、運搬者	運送屋、運搬人、運送業者、配達人	運送業者、運送人、運搬夫、配達人	運送人、運搬夫
conveyor	運送者、輸送者	運搬者	運送者、運搬人	運搬者

「carrier」は、当てられた「運送屋」「運送業者」「配達人」「運搬夫」などの訳語か

ら類推して<ある種の労働に従事する人>という意味を表す。そして、「conveyor」は 「運送する」ことを職業とする人ではなく、<運送する」行為を行う主体>を表す。「carrier」のように<ある種の労働に従事する人>という、限定された意味を表す場合、「者」を含む訳語から「人ニン」を含む訳語に変わる傾向がみられる。

③「耕作人」と「耕作者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
cultivator	耕作者	耕作者	耕作人、耕作農	耕作人
planter	耕作者、栽植者	植付け手、種を蒔く人、耕作者、据附け 手	植付け手、種を蒔く人、耕作者	植付ける[種をまく]人、栽培者、耕作者

「者」から「人ニン」に変わる「cultivator」の「耕作人」は、いっしょに当てられた「耕作農」と同様、<耕作の労働に従事する人>を意味し、「planter」の「耕作者」は<耕作する行為の主体>を表す。<ある種の労働に従事する人>の意味を表す訳語の場合、「者」を含む訳語から「人ニン」を含む訳語に入れ替わる。

イ.「人ニン」を含むものから「者」を含むものに変わる例

①「継承人」と「継承者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
heir	継承人、継承すべき人、後継者	後継者、継承人	(比喩的)(両親・祖先の精神的性質・利益・言伝へ・理想等の、または両親の肉体的性質を継ぐ)後継者、継承者	(比喩的)(両親の特性・祖先の精神・理想・伝統などの)後継者、継承者

「heir」の訳語は『井上』と『研27』では「継承者」と「継承人」両方が当てられていたが、『研36』と 『研53』では 「継承者」に落ち着く。ある<行為の主体>を表す場合、「人ニン」を含む訳語から「者」を含む訳語に変わる傾向がみられる。

②「交代人」と「交代者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
relay	交代人	交代人	手替(てかはり)交代者、新手	手替(てかはり)交代者、新手

「relay」の訳語 「交代人」は、『研36』で 「交代者」に変わる。「交代者」は、一般的な<行為の主体>を表す。「交代人」は 「人ニン」の一般的な<行為の主体>を表す例で、「交代者」に入れ替わる。

③「奉仕人」と「奉仕者」

見出し語	『井上』	『研27』	『研36』	『研53』
server	勤務者、服役者、給仕人	勤務者、奉仕人、給仕人	仕へる人、勤める人、勤務者、奉仕人、給仕人	仕へる人、勤める人、勤務者、奉仕者、給仕人

『研53』で「奉仕人」から「奉仕者」に変わる「奉仕人」も「継承人」「交代人」と同様、「人ニン」を含む訳語で一般的な<行為の主体>を表すものであるが、「者」を含むものに変わる。すなわち、「人ニン」と 「者」の訳語の変遷をみた際、<ある種の労働に従事する人>という、限定された意味を表すときは 「者」を含むものから 「人ニン」を含むものに変わり、一般的な<行為の主体>を表すときは、「人ニン」を含むものから「者」を含むものに変わる傾向がみられた。

明治末期から戦後の間、「人ニン」の一般的な<行為の主体>を表す意味は 「者」に吸収され、<行為の主体>のなかでも<ある種の労働に従事すつ人>という、限定された意味に縮小され、造語機能が縮小する傾向がみられる。

Ⅵ. まとめ

本稿では、明治末期以降その用法が活発になったとされる、接辞的字音形態素のなかでも<ひと>を表すものの変遷について考察した。その結果を以下にまとめる。

① 明治の終りから戦後の間、唯一初出語数が増えるのは 「員」である。戦後増えた新しい職種に従事する人を表す必要性から「員」を含む、<会社や団体の中である仕事を受け持つ人>を表す訳語が増えたのがその理由とみられる。

② 初出語数が一旦減少してから再び増加する「人ジン」は、昭和10年を前後にして「人ジン」の前に来る成分が<場所> <時> <状態>のもの以外に<活動> <精神>を表すものにまで拡大し、造語機能が拡大する傾向がみられる。

③ 初出語数が減少する接辞的字音形態素の中でも 「人ニン」は、その意味が<ある種の労働に従事する人> <法律関係上の主体>に縮小し、それ以外の一般的な <行為の主体>を表す意味は「者」に吸収され、造語機能が縮小する傾向がみられる。

参考文献

辞書類

見坊豪紀他編(1993)『三省堂国語辞典第四版』三省堂、p.77

論文類

荒川清秀(1986)「―性―式―風」『日本語学』5-3、明治書院、pp.85-91

村木英樹(1986)「―料―代―賃―費(―金)」『日本語学』5-3、明治書院、pp.97-104

杉村博文(1986)「―者―家」『日本語学』5-3、明治書院、pp.92-96

田窪行則(1986)「―化」『日本語学』5-3、明治書院、pp.81-84

野村雅昭(1973)「否定の接頭語 『無・不・未・非』の用法」『ことばの研究4』、国立国語研究所、pp.31-50

_____(1978)「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究Ⅸ』、国立国語研究所報告6、pp.102-138

_____(1979)「同字異音―字音形態素の造語機能の観点から―」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』、勉誠社、pp.729-752

_____(1981)「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』、pp.10-49

原 由起子(1986)「―的」『日本語学』5-3、明治書院、pp.73-80

❖ 투고일 : 2009. 12. 31.
❖ 심사일 : 2010. 1. 11.
❖ 심사완료일 : 2010. 1. 20.